

## 武蔵野日曜聖書講筵

## 門

## ——マタイ伝第7章13～14節——

1983年1月23日

小池辰雄

狭い城門 地獄の門 煉獄の門 大道無門 門弟 贖いの門 天門 十字架の門

## 【マタイ7】

13 狭き門より入れ、滅ほろびにいたる門は大きく、その路みちは広く、之より入る者お  
 おし。14 生命いのちにいたる門は狭く、その路は細く、之を見出すもの少なし。

## ●狭い城門

「狭い」という「ステノス」というギリシア語は「まつすぐな」という意味もありますが、要するに狭いわけです。この門は城門です。昔は町に門がありましたから。門がいくつもあるわけです。その「狭い城門」というのが実際の言葉の背景らしい。ヨハネ伝の10章に

「我は門なり」

という言葉がある。キリスト自身が「狭き門」です。生命に至る門ですから。

7 この故にイエス復またい給う『まことに誠に汝らに告ぐ、我は羊の門なり。

8 すべて我より前まへに來りし者は、盗人ぬすびとなり、強盗なり、羊は之に聴かざりき。

9 我は門なり、おおよそ我によりて入る者は救われ、かつ出入でいりをなし、草を

得べし。10 盗人のきたるは盗み、殺し、亡きんとするの他なし。わが来るは

羊に生命いのちを得しめ、かつ豊かに得しめん為なり。11 我は善き牧者ひつじかひなり、善き

牧者は羊のために生命を捨つ。』(ヨハネ10：7～11)

「羊」は、もちろん詩篇23篇のように、神・キリストを牧者にして、イスラエルの民が羊という、そういう譬えでいわれているわけです。牧者が羊を導いて出入りする門です。

「我は善き牧者なり、善き牧者は羊のために生命を捨つ」

とある。羊を守るためには生命賭けで守るといっわけです。

また、ヨハネ伝の14章6節に、

「6 イエス彼に言い給う『われは道なり、真理まことなり、生命いのちなり、我に由らでは

誰にても父の御許みもとにいたる者なし。』(ヨハネ14：6)

「道なり、真理なり、生命なり」という。「道」という。それで、生命に至る道という。

ここにも「路みち」という字が書いてある。その路は細いという。生命にいたる門は狭くて



路は細い。道という字はギリシア語では「ヘー ホドス」という字です。ヘブライ語では「デレク」。日本語では「道」と「路」の二つあるわけですが。

### ●地獄の門

ダンテの『神曲』には地獄に門がある。地獄の門はどういう門かというのと、「インフェルノ」(地獄)の第三曲に出ています。ダンテの『神曲』はいつペン是非お読みなさい。そう簡単に読める本ではないけれども。

「われをよぎりて憂愁の都へ

われをよぎりて永劫の憂苦へ

われをよぎりて滅亡の民のうちへ

正義わが高き創造主を動かし

神の力、至高の知恵

また本源の愛、われをつくれり。」

と。地獄の門は神の正義と神の力、至高の知恵、本源の愛によってつくられていると。この地獄の門にそういうことが書いてある。これは地獄の門に書いてある文字をダンテが読んでいるわけですが。

「永劫のものその他、

われより先につくられしものなく

われはまた永劫に続く。

一切の希望を捨てよ、

汝らここに入る者。」

この門から入る者は一切の希望を捨てろと。地獄はもうどうにもならないというわけです。神の義によって審かれています。審きの門です。しかしながら、

「本源の愛、われをつくれり」

とある。神の義には必ず、またそこに深い愛がある。

ダンテが書いている地獄は、もちろんこれは詩ですから、その通りではないでしょうけれども、しかし、霊的な内容を詩的な表現で言っているわけです。

私の構造でいうと、これがこの世ですね、悪の幕屋。その下に地獄(インフェルノ)がある。これが地獄の門。天界へはここを通っていく。これはパラダイス(パラディソ)。けれども、このインフェルノもパラディソも、これはまだ仮りなんです。世の末がくると、今度は、こっちに本天国と、こっちに本地獄がある。ダンテはこのように地獄を見てきましたけれども、この地獄の鬼がひよつとしたら救われるかもしれない。とにかく、「第二の死」というのがある。黙示録に書いてある。「最後の審判」というのがまだ残っているのだから。最後の審判でこの地獄の鬼が本地獄へ行くか、あるいはこちらの方へずつと救われていくか、そこ



まではダンテは言わない。ダンテはこれを本地獄にしてしまっている。私の構造はダンテとちよつと違う。まだ本地獄がある。新天新地がある。黙示録によると、どうもそういうことらしい。

とにかく、ダンテは人間の罪をいろいろ分類して、だんだん下へ行くほど重い罪になる。反逆の罪が一番重い。神に反逆したサタンが地獄の一番中心にいます。意志的な反逆、意志的な罪ほど下にくる。知的、情的な方は上なんです。人間の人格の中心は意志ですから、意志でもって背いたりする。非常に傲慢な人間は下の方へくる。だから、意志の強い人というのはおそろしいね。マイナスの強いところへ行くと、今度は意志の強い人が逆にひっくり返って——パウロがその著しい例です——そして今度は、非常に天国の高いところへ行ってしまふ。

とにかく、地獄の門は、そういう門があるということです。しかし、ダンテがいかに義と罪との秩序をはつきりとしているか。彼はいろいろな迫害にあいましたから、政治的ないろいろな意味で。そして追放されたし。彼はまるで一人一党みたいな男だったから。

### ●煉獄の門

それから、ダンテの『神曲』の「天国篇」の第九歌に煉獄の門がある。どういう門かというところ、これはつぶさに書いてある。これは中山昌樹の訳ですけれども。

「ここに一つの門とこれに至るため下に異なる色の三つの段と、まだもの言わぬ一人の門守とを私は見た。そこに向い、目をいよいよ開くや、上の段に坐しおる者を見たが、その顔に私は耐え得なかつた。彼は白刃を手にしてその光線を我らの方に反射せしめたので、私はしばしば顔を上げようとしたが徒らであつた。彼は語りはじめた。『汝らの願いをそこより語れ。護衛者はいずこそ。上りきて身をそこなわぬよつ心せよ』。わが師（ヴィルギリウス）は彼に答えた。『これらのことを知る天の貴女（ルチア）がいまし、「かしこにゆけ、その所に門がある」と我らに言った』。慇懃なる門守は二度始めた。『彼女は汝らの歩みを善に進めんことを。さらば、我らの段に進めよ』。そこで我らは第一の階段に來た。これはいと潔く滑らかなる白き大理石にて、私の姿はさながらに映し出された。

白い大理石の所に來たものだから、それが鏡のように映るわけです。あるがままに、そこに映される。

第二は暗紫色よりも色濃く縦横にひびの入った荒い焼けた岩であつた。「荒い焼けた岩」というのは懺悔の象徴だそうです。

上にかさむ第三の階段は脈より迸る血のごとく永遠たるプロフィード（白い斑点のある赤い石）のように見えた。

これは十字架の血の象徴です。さすがに、ダンテですね。白斑紅石という。キリストの愛



と十字架の血です。贖罪の愛、十字架の象徴です。

この上に神の使いが二つの足裏を置き、金剛石のように見えたくしきみの上に坐していた。三つの段を越えて、高くわが導き手、導者は懇ろに私を引き連れていった。『謙って彼に錠をはずすように求めよ』。恭しく身を聖き足元に投げ、憫みてわがためにこれを開くように乞ったが、まず私は胸を三度打った。

「胸を三度打った」ということは、自分の思いと、思いから出てくる言葉と、思いから出てくる行為。意・言・行です。これを打ったということは、それに対して自分の過去のそういった意・言・行に対する懺悔の気持を表す。

剣の先にて七つのP（ペー）をわが額に印して、『汝、うちにあるとき、これらの傷を洗え』と言った。

「罪」という字はイタリア語で「ペッカタ」という字ですが、「七つの罪（ペッカタ）」はどういうのかというと、

傲慢の罪、嫉妬の罪、怒りの罪、怠けの罪、貪りの罪、強食の罪、邪淫の罪

この七つの罪です。順序も正にこの順序でだんだん清められていく。やはり、傲慢から一番意志的なものからだんだん情的な方へ移っていく。

灰または掘られて乾く土は彼の衣と同じかるべく、その下より彼は二つの鍵をとり出した。一つは金、一つは銀であった。

黄金の鍵と白銀の鍵があるわけです。

まず白い方を次いで黄金の方を扉に合わせて、私を満ち足らしめた。彼は我らに言った。

『この鍵のいずれかが合わずして、錠の中に正しく回らぬときは、その開口は開かれず、

一は貴さ勝り、

黄金の方ですね。「黄金の鍵」というのはキリストの十字架による罪の贖いのことを表されている。

一は錠を開くに優れたる巧みと才とを要す。

「銀の鍵」の方は——これはやはりカトリック的な考えでしょうね——アリストテレス的な意味の知の世界です。明智、明らかなる知です。やはり、ちゃんとした明らかな認識がなければいかんという意味です。

これ結びを解くものなるによる。我はピエトロより双鍵を受く。彼はまた、民がわが足元に平伏しだにせば、閉じおくよりもむしろ開きて誤れと私に言った。かく聖き門の扉を押して彼は言った。『入れよ。しかし、後ろを顧みる者の外に帰るべきことを汝らに知らず。』

「手を鋤につけて後ろを顧みる者は神の国にふさわしからず」

というキリストのあの言葉からきているわけです。だから、

「後ろを見てはいかん、前を見ていろ」



と。で、これは鍵は合ったわけだね。

この正門の金属の軸が蝶番ちょうつがいのうちに音をたてて強く回った。……」

そんなことが書いてある。三つの段がある。初めの、よく映る世界は、自分というものの認識だ。それから荒い岩の所、懺悔にきて、それから最後の白い斑点のある紅の石、そこで十字架の贖いということになる。罪の認識、懺悔から、キリストの十字架の贖罪となる。それでもつて、それをちゃんと受け入れると、鍵が回るわけです。なかなかおもしろいと思う。そういう門。今は「狭き門」というと、日本では入学試験のことをいうわけです。日本では入学試験はもう幼稚園から始まっている。大学まで。まあ、

### 「試験、試験」

とって、入学試験の門は狭いという。困ったものだね。天野貞祐先生がいつか私に言いました。ある程度の答案が書いていけば——70点でも60点でも——そういう規準を越えた連中は、あとはくじで取れと。くじでいいんだと。小学校から中学へいくときも、中学から高等学校へいくときも、高等学校から大学へいくときも、それぞれの過程における基本的なことをしっかりと身につけていけば、入学試験には及第するようにする。あとはもう、くじでよろしいと。有名校もへつたくれもないと。私はその天野先生の考えには大いに賛成です。偏差値が何点以上でなければどこの学校を受けてはいかんとか、品定めをしてみるのはよくない。もつと自由にさせなくては。くじで入れて、いろんなのが入ってきたら、今度は中でもつて、いい加減なことをしていたら落第。落第を二度やれば退学。それくらい厳しくやればいい。ただ一回の紙の答案でそんなに分かるはずはない。普段実力がある者も思い違いをして、ヘタして落っこつたりするものもあるし。

### ●大道無門

『無門関』むもんかん という本の序のところに出てくる言葉に、

「大道無門 千差道路たいどうむもん (大道無門にして千差路あり)

透得此関 乾坤独歩けんこんどくぽ (此の関を透得すれば乾坤独歩せん)

とある。これは前に「終末的帰一」(小池辰雄著作集第四卷『詩篇珠玉集』「詩篇87篇」の項)という題で、この言葉を引用して解説を書いたことがある。

天下の大道には門がないという。天下の大道は誰でも通れる。盗人も通ることができし、男でも女でも、どういう職業の人でも、誰でもが通れるのがこの「大道」です。こういう人でなければ通つてはいけないなんていうのではない。無差別、平等です。どんな人でも、猫でも鼠でも通れる。それが大道。そこには門がない。どこからでも入れる。この門でなければならぬという門はない。

### 「大道無門」

とは要するに、無条件に誰でもがこの道は歩けるといふことです。



天子でなければ歩けないというような道があるよな。中国の故宮なんか行っても、まん中の龍の模様のある所は天子でなければ歩けないことになっている。観客もまん中は通れないから、両脇を通る。それは昔の歴史を重んじて、そうしているんでしょうけれども。それは大道ではない。それは特別の道なんだ。

しかし、一番大事なのは、誰でもが無条件に受けとることのできるもの。それが一番大事なものです。いつも申し上げているように、誰でもが無条件に受けとっているものはこの空気です。空気はお金は要らない。どんな乞食でも、どんな大臣でも同じことだ。それが大道、大道無門ということ。

「千差路あり」  
せんさみち

という。「路」は即ち、各々の足で歩くところ。誰でもが各々の足で歩く特別なみち。人生の路は一人ひとりみんな違っていきます。同じ路にみんな歩かない。運命環境が、生い立ちがしからしめている。神さまが

「お前はこのみちをゆけ」

というときの、その「みち」はこの「路」の方です。だから、一人びとりのことを思えば、それぞれは本当に特別な路を歩かせられているということ。 「大道無門」と「千差道路」とは全然違ったことをいっている。

「此の関を透得すれば乾坤独歩せん」  
こかんとうとく けんこんどくぽ

という。「乾坤」は天地、宇宙です。「この関」とは門のない関所。関所はみな門があるのに、「無門」の関」という。

「此の関を透得すれば」

とはどういうことか。この「路」が——我々一人びとりが歩かせられている路が——この「道」に即しなくてはいかん。これが即するときにはじめて、この関を透得することができる。一人びとりはそれぞれの路を歩きながら、本当に大道を歩いているのと同じ歩き方をする。カントが道徳哲学の方で、

「我々の意志の格律が」

我々が自分の意志でもって、こうであると思うところの主観的な法則が即ち「路」になる

主観的に自分はこの道だと思つことが、誰がその場において考えてもそうであるというように、普遍の法則に合致するよつに行動せよ」

という。これがカントの「絶対命令」という。カントの道徳哲学はあまりにもそれが観念的にピシヤツとしているものだから、観念哲学なんていわれるんだけど、しかし、そこには非常に深い真理がある。

「普遍の律法として妥当するごとく行動せよ」

とは素晴らしい言葉です。即ち、



「千差路あるところの、その路が道に即するように行動せよ」ということだ、カントの言葉に直せば。路が道に即するように行動せよ。そのときに、無門の関所を通ることになる。門無き門を通ることになる。乾坤、天地、宇宙を自由に闊歩できると。これが、無門関の序文にある素晴らしい言葉です。

### ●門弟

キリスト教は、カトリックでなければならんとか、プロテスタントでなければいかんとか、プロテスタントの中の何々宗派が本当だとか、やれ幕屋だ、召団だ、無教会だなんて言って、自己主張したらダメなんです。召団がキリストのエクレシアに即しているか。然らば、よろしい。無教会がそれに即しているか。然らば、よろしい。

それは私がこないだ『エン・クリスト』12号に「新宗教改革」という題で書いたでしょ。どれでも結構だと。問題はそこに本当に十字架があるか、本当に聖霊が来ているか。愛の実存に本当に打ち込んでいるか。それだけのなしです。在り方はどれも結構だ。だから、「召団」というものは何も粹はない。非常に自由です。ただ、我々はそういう特殊性をいってだしている。人間は観念じゃないから、我々のは「召団」という。それぞれ特殊性は大いにあるべきなんです。

チューリップにケシになれと言ったってダメなんです。チューリップはチューリップ、ケシはケシ、それぞれの姿と色と香りで神の、太陽の光を具現しているわけだ。太陽の光がこういうように色々変わって、特殊性をもっている。しかし、その特殊性の中に太陽の光がちゃんとあるんだ。それがその普遍的な法の世界です。普遍の法をもって、普遍の法を特殊が表している。ところが、造花はそうはいかん。だから、それぞれの特殊性があるが、「お前もこうなれ」

とひとに強いてはいかん。どれでも結構です。問題はそれが本ものを表しているかということだけなんです。だから、自由なんです。私は人をひとつも縛らない。

「門弟」という言葉があるね。キリストの門弟は十二使徒。キリストという門のお弟子さん。

### 「我は門なり」

という。これはおもしろいね。私は

「皆さんが私のように考えたり、私のようにしろ」

なんてひとつも言っちゃしない。ただ、私を通しているところの本ものをあなた方が受けとって、あなた方がその本ものにおいて、あなた方らしい在り方をしていけば、それがいい。それが本当の師弟関係だと私は思っています。いわゆる相対的な、何て言いますかね、偉ぶって「先生だ」なんてやっているんじゃないですから。それは親鸞が言ったとおり、

「自分には弟子が一人もない」

と、その通りです。しかしながら、本当の師弟関係というのはそういったような絶対者を



中心としての間柄です。だからもう相対的にどうであるかという、転んだり滑ったりしやしない。どこまでもお互いに担いでいく。それが本当の關係です。人間はどうせいろいろ欠陥がありますから、それでどうのやっていたら必ず崩れていく。

### ●贖いの門

私たちにとっては、しからば「門」は何かというと、これはキリスト自身が

「我は門なり」

と仰った。

ダンテの煉獄の門のところにキリストの十字架が出てきた。贖いの門です。ここにぶつ倒れれば、平伏せば、

「門を叩け、さらば開かれん」

という。体当たりしてぶつ倒れると、門が開かれる。自分という、自我という、我執というやつがみんなすつ飛んでいってしまう。すつ飛ばされている現実を受けとるわけです。

相対的な我々は決して本当にすつ飛ばされきれていません。死にいたるまで罪びとです、誰でも。けれども、その根底に既にすつ飛ばされるところがある。そこはもう、我々がどうであろうと、全存在が現在も過去も未来も全部贖いとられている。それを本当に受けとってごらんさいよ。聖霊は来ざるを得ないですから。頭ではないですよ、全存在ですよ。もう自分は根底的にはすつ飛んでいるんだ。私が言う「無」なんていうのは、

「私が無い」

という「無私」なんていうのは——自分で無私になれないのは当たり前のはなしです——賜りたる無私の世界です。そこに無限無量なる聖霊がくる。だから、無即無限無量という。イエス・キリスト自身が無なんだ。そうしたら、即無限無量です。

「我を見し者は父を見しなり。なぜ、私のことを善いと言うか」

と、彼は全部否定しているんだから。

「自分なんか何でもないぞ」

と。さきほど読まれたコリント後書6章のところは素晴らしいところです。あのような自由闊達な世界は無の世界なんです。

「あれども無きがごとく、無けれどもあるがごとく。持たざるごとく一切を持つ」という、無即無限無量の世界です。

この無を賜ると、その門の先は無限無量の聖霊の世界です。無限の世界、無限界、限界の無い世界です。宇宙と同じ。正に、「乾坤独歩」なんだ。

そういう無限界。私はもう、「広いの狭いの」と言いたくない。だから、今日の表題にただ「門」と書いた。相対的にただ広いの狭いのなんて言いたくない。狭いといえば、正に自分一人しか入れない、通れない。誰も並んでは通れない。何か持って通れない。これは裸で何も



持たずに通るところの門です。よく、女の人は

「一緒にいきましょう」

なんて言うが、ここは一緒ではないよ、一人ひとりだよ、みんな。女の人に「来なさい」というと、きつと誰か誘ってくるね（笑）。誘って結構なんです。ここは誘えないんだ。ここは一人びとりが一对一でもつてぶつかっていくところの門ですから。

もう、狭いとか広いとか言いたくない。キリストの御言はそれでいいですよ。いい加減な気持ちで、ワツシヨイ、ワツシヨイと入るのは広い門だ。そういうところは本当の天国へは行けない。一人びとりが真剣勝負のところだ。そういう意味においては、やはり宗教の世界は、何ととっても、問題は個の魂が一番大事なんです。そうかといって、いわゆる個人主義ではないですよ。けれども、そういうった個が集まっているところは凄いです、何人であろうと。もう人の数によらない。キリストの本当の弟子はパウロとヨハネとペテロではないですか。あるいはヤコブを入れても四人だ。新約聖書は、それが全世界をひっくり返すようなことになってしまった。この聖書一巻は、何が滅びても、この本は滅びない。これは神の現実が展開している書だから。考えられた書ではないんだ。すべて証しの書だから。劇的な証しの書ですから、正に活ける文字、活かす文字なんだ。

## ●天門

キリストは即ち門である。旧約でもそうじゃないですか。創世記28章です。ヤコブがお嫁さんをもらいに出かけて行くわけだ。その行きがけの路で、石を枕にして寝ていたら、天から梯子はしこが下りてきた。ああ、ここが天の門であったか。石の枕で見た夢は天門であったと。

「10 あつとこにヤコブ、ベエルシバより出たちてハランの方におもむきけるが、

11 あつとこ一処にいたれる時、日暮れたれば即ち其処そのところに宿り其処の石をとり枕となして其処ふしに臥いねて寝たり。12時に彼夢ゆめみて梯はしこの地にたちいて其の巔いただきの天に達いたれる

を見、又神の使者の其れにのぼりくだりするを見たり。13エホバ其の上うへに立

ちて言いたまわく、我は汝の祖父ちちアブラハムの神イサクの神エホバなり。汝

が臥すところの地は我これを汝と汝の子孫に与えん。14汝の子孫は地の塵沙すな

のごとくなりて、西東北南ひろがに蔓ひろがるべし。また天下の諸もろもろの族やから、汝と汝の子孫

によりて福祉さいわいをえん。15また我汝とともにありて凡て汝が往くところにて汝

をまもり、汝をこの地に牽返ひきかえるべし。我はわが汝にかたりし事を行うまで汝

をはなれざるなり。16ヤコブ目をさまして言いけるは、誠にエホバこの処ところに

いますに我しらざりきと。17すなわち惶懼おそれていいけるは畏おそるべき哉かなこの処ところ、

これ即ち神いへの殿ほかの外ならず、これ天の門なり。」（創世記28・10～17）

と書いてある。神さまが一緒にいらっしやって歩いてくださるところ、至るところこれ門なんです。これが無門の門なんです。その関所は常に開けられる。無門の門。真理はみん



なこういう表現で出てくる。無善の善、無信の信。だから、私は「無」という言葉が素晴らしいと言っている。自分の側がぬけてしまうと、本ものがそこにやってくるから。

### ●十字架の門

キリストという門は——私は門の中に十字架をしょっちゅう書きますけれども——こういうように書くときまた意味がまた違ってくる。こつちは聖霊の空間です。こつちは十字架。キリストは聖霊の空間をもった門と、十字架の門と両方の門なんです。キリストというのはそういう二重の門です。

マタイ伝5章3節の、

「恵福なるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

この一句が、皆さん、本当に身に付いたでしょ。あの一句が天国への門なんです。天国の門であり、また鍵であるわけです。霊は貧しくされているんだから、十字架で。自分を何もものと思わなくなっただから。もう、罪だとか、穢れだとか、そんなことを皆さんは考えないでいい。光の世界にはつきりと目をすえてください。もつと積極的なことにならなければダメですよ。

とかく、クリスチャンというのは「罪、罪、罪」と言っている。ダンテは煉獄を通るのに、ペツカタ(罪)をだんだん消されていくけれども。本当はもうペツカタは消えているんです。この白い斑点の赤い石の所を通ったら、ダンテは本当はペツカタは消えている。それはまたカトリックのカトリックたるところですけども。ダンテがあそこで、

「もう罪は本当は消えているから、これはだんだん消える。俺は柴に登っていくぞ」

と、それくらいのことを言っていれば、大したものだ。そこまではダンテは言わなかったけれども。まあ、私に言わせると、ちよつと始末にならないね。それはもうキリストの絶対恩寵の世界に入っていたら、あとは証していくだけです、私たちは積極的に。躓いても転んでもいい。どしどし展開して行ってください。くよくよすることはいいから。

この詩篇87篇は、今日のついでに読んでおいてください、お家に帰ったら。私の著作集の第四卷(『詩篇珠玉集』)です。私は自分で言ったらおかしいけれども、この詩篇の一つひとつを読みながら、小さい集会だつてできるんです。そして、読みながら、またあなたが感想を言いながらだつてできる。もうどういいう形にでも集会というのはできるんですよ。

「どれだけ聖書を勉強していなければ」

なんてことはひとつも要らない。毎日、ぶつつけ本番でいけるんです、この御霊の世界に入ったら。だから、集会には来て、そのコツをしつかりつかんでくださいと申し上げているわけです。

